しかし、パスカルそしてかれ同様アウグスティヌス的傾向をもつ人々の特徴は、神の存在や摂理・魂の不滅性といった重要な真理を理性の領域から排除していることである。一方、デカルトやトマス派の神学者にとってはこれらの真理は哲学に属する。このことは、パスカルが、徹頭徹尾哲学は神の存在を証明する能力を欠いていると考えているからではない。かれは哲学はそうしたことがらについては余りに不確実で不明確な認識しか与えないといって非難しているのである。

> 神の形而上学的証明は人間の推理をはるかに超え、かつきわめて込み入っているため、少しも人の心を打たない。もしそれが何人かの人の役に立つとしても、その証明を目の当たりにしている瞬間しか役立たないであろう。一時間後には、その人たちも騙されたのではないかと思う。(L190)

神の存在の哲学的証明が有効だとしても、そのような証明はキリスト教徒にとってはやはり無益であろう。

> キリスト教徒の神は、単に幾何学的真理や宇宙の秩序の創造者たる神にのみ在ますのではない。それは異教徒や快楽主義者の見解である。(L449)

パスカルが立てた権威と信仰、実験と推理の間の対立は、やはりパスカルによるそれら各領域の境界の設定とともに、学者の研究活動と宗教行為相互のある種の自立を保証することになる。しかしながら、このことはわれわれがキリスト教弁証論的見地に身を置く場合にはかなり微妙な問題を引き起こすことも再確認しておかねばならない。事実、キリスト教の真理は権威を通してわれわれに与えられる。さらに、この権威を受け入れる、つまり、信じなければならない。弁証論の本質はまさに、信仰を持たないひとびと、聖書の権威を認めないひとびとに訴えかけることであるから、唯一可能な解決は理性と実験から出発することであろう。しかしこれらの手段は宗教的認識には適さないのであるから、この認識方法にかなう問題に限らねばなるまい。したがって、自分の認識論に忠実に、パスカルはその弁証論を人間学から始めざるをえない。人間研究においては、理性は行けるところまで行き、自分の敗北、つまり自分では満足のいく説明ができないと認める時はじめて認識方法を変更し、矛盾を解決できる唯一のものたる権威を受け入れるべきであろう。

説得術

自分が得た知識を他人に伝えることは『説得術』にほかならない。これは『幾何学的精神について』第二部の主題である。パスカルにとって「説得術は説き伏せる技術であると同時に人の気に入る技術でもある。」この小論の終りでかれの立てた規則は、首尾よく説き伏せる方法に関するものだけである。といってもちろんパスカルが人の気に入る技術をなおざりにしているわけではない。

> しかし人の気に入る方法は、説き伏せる技術とは比較にならないほどはるかに困難で微妙、有益かつ感嘆すべきものである。それゆえ、わたしがそれを取り上げないのはそうできないからなのである。もっと言うと、わたしは自分がそういうことを論ずるにはおよそ相応しくないため、そんなことは完全に不可能だと考えているからである。

しかしながら、パスカルが人の気に入る技術の存在を否定しているわけではない証拠に、すぐ次のように付け加えている。「わたしが証明のためと同じぐらい確実な、気に入るための規則が存在すると思っていないからではない。」パスカルがこの主題について考えをまとめていた時期はおそらく、『幾何学的精神について』中の小論を執筆していた時期であった。第一部の『幾何学的精神について』がデカルトのテーマの焼き直しであるのに対し、第二部はパスカルならではの関心事のひとつの輪郭を描き出そうとする独創的な努力の現れである。『幾何学的精神について』はおそらく1657年から1658年に執筆されたと思われる。それはすでにパスカルが『パンセ』に取り組んでいた時期である。かれの考えは執筆が進むにつれて形作られていった。そう考えるといくつか矛盾のあることの説明がつく。人の気に入る方法が「より困難で微妙、有益かつ感嘆すべきもの」であると述べる一方で、論述の展開のはじめで「この道は低級で卑劣でよく知られていない」とも述べている。